◆2022 年 2 月第 1 週の礼拝説教
■日時：2022 年 2 月 6 日（日）
■場所：立川教会
■説教題：「自分が走ったことも、労苦したことも無駄ではなく。」
■聖書：新約フィリピの信徒への手紙 2：1－18（p362）
■讃美歌：18「心を高くあげよ」・377「神はわが砦」

お早うございます。

すでに皆様にはお手紙でお知らせしたように、立川教会は、先週の火曜日に都の病床使用率が 50%を超えたことを受けて、緊急事態宣言の発出を待たずに全ての集まりを休止することに致しました。今回は、子どもたちへの感染も拡大していることから、8 時半からの教会学校と 9 時 15 分からのジュニア礼拝もお休みとなります。夕礼拝も同じです。教会学校は、私の赴任 6 年目にして初めてレギュラーとなるご家族が与えられ、前回はお父様も出席して下さったにもかかわらず、残念です。全ての集会の再開は、蔓延防止等重点措置が解除されてからを考えています。

ところで、3 回目のワクチン接種が急がれている一方、先週テレビを見ていて知ったことがありました。世界の発展途上国では、未だ 85%の人々がワクチン未接種であること、又アフリカでは、ワクチンを受けた人の割合はわずか 8%であることです。先のデルタ株はインドで、オミクロン株はアフリカで最初に発見されていることから、何よりも接種が行き渡ることがとても大切であると思いました。

但し、いつも確認していることですが、ワクチンの接種を受けるか受けないかは自由です。それぞれが健康を守る努力を重ねる、そのことを忘れずに生活して行きたいと思います。

それでは、今日与えられた聖書の御言葉を見てまいりましょう。

フィリピの信徒への手紙第 2 章 1 節から 18 節です。

パウロにとってフィリピの信徒たちは、パウロを精神的にも経済的にも助けていた人々でした。ガラテヤやコリントの信徒たちとは違い、パウロの心を悩ませる人々ではありませんでした。ですから、この手紙には、フィリピの人々の信仰や教会生活を批判する言葉は何一つ出て来ていません。それどころか、獄中からであっても、心穏やかに、語りかける

ように書かれています。彼らは心許せる人々でした。そのような人々に、パウロはさらに信仰者としての成長を呼びかけます。

まず1節から4節です。

１：そこで、あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、

２：同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください。

キリストによる励まし、愛の慰め、”霊”による交わり、慈しみの心、憐れみの心。

何と言う満ち足りた言葉でしょうか。皆同じ思いとなってこれらの言葉に生き、愛し合い、心を合わせ、思いを一つにする交わりがあるとすれば、それは夢のようです。パウロはフィリピの人々に語るのです、どうかそのような思いを皆抱いて欲しいと。そうすれば、たとえ囚われの身であっても、私の心は喜びで満たされると。

私は、パウロの気持ちが分かるように思います。

自分の置かれている状況がどれほど厳しくても、自分の愛する人々の間に平和と、喜びと感謝に満ちた関わりが生まれていることを知る時、人は慰められます。

反対に、自分がどんなに恵まれた状況にいようとも、愛する人々の間で、争いや妬み、憎しみや分裂が生じている時、心は暗く沈むのです。

ですから、パウロは、彼に対する物心の伴う心からの支援者であるフィリピの人々に対して、さらに素晴らしい交わりが生まれることを願います。

それは、3節から4節のような交わりです。

３：何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え、

４：めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。

５：互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

と。

利己心や虚栄心、それは、相手の素晴らしさを認めることが出来ない心から生じます。

へりくだると言うことは、自分は完全ではなく、自分にはなお欠けたるところがあり、足りないものがあることを正直に認めることです。それが出来た時、人は自然に謙虚になり、自分にはない相手の優れたところを認め、受け入れ、さらに、一人孤高の道を歩むのではなく、他者の助けを得て共に生きることの豊かさを知ります。キリスト・イエスも又そのように生きたのですと。

そして、次に、パウロ書簡の中でも最も知られている箇所の一つであるキリスト賛歌が語られます。6 節から 8 節です。

６：キリストは、神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、

７：かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、

８：へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。

キリスト賛歌と呼ばれるこの箇所で使われている言葉ですが、実は、通常、パウロが使っていない言葉が使われています。つまり、この賛歌は、ユダヤ社会においてはすでに言い伝えられていたもので、パウロはそれをそのままここに用いたか、あるいは内容を変えずに多少の手を加えて用いたかです。いずれにしても、この賛歌は、イザヤ書 53 章の主の僕の詩を想い起させます。

私は、このキリスト賛歌の中で、特に 8 節の御言葉に引き付けられました。即ち、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」と言う御言葉です。

従順。

従順とはどのようなことでしょうか。

全く、完全に、一点の違いもなく相手に従うと言うことです。

私は、これまでの人生の中で、誰か他者に従順であった記憶はありません。

学びの場での先輩はいました。

仕事上の上司もいました。

勿論彼／彼女らの指示には従いました。

しかし、従うと言うことと、従順とは少し意味が違うと思います。

従うと言う言葉には、従わせられる、つまり社会的な力関係の意味合いがありますが、従順には、従う側からの自発的な意思があるように思うのです。

そして、この 8 節では、イエス様の神様に対する関わり方が示されています。

死に至るまで、それも十字架の死に至るまで神様に従順であったと。

今週、『立川教会創立 70 周年記念誌』が出来上がります。皆様のお手元には、今週から来週にかけてお届けしたいと思っています。最後の校正の仕事をしながら、お寄せいただいた 30 余りの原稿に目を通しました。そして、つくづくと思うところがありました。それぞれの原稿から確かに共通して滲み出て来るものがあることです。どの原稿からも、間違いなく滲み出て来るのです。それは、神様への変わらざる信仰と共に、従順であろうとする姿です。

教会への出席は、誰からも強制されたものではありません。

それでも、日曜日ごとに、なぜ礼拝を守ろうとされているのでしょうか。

なぜ、礼拝に集い、讃美歌を歌い、聖餐に与り、御言葉に耳を傾けるのでしょうか？

しかも無条件にです。

私は、そこにこそ、神様に服従する信仰者の姿を見出します。

共に集い、礼拝を捧げるそのことこそ、「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで（神様に）従順で」あることなのです。そして、この礼拝への参与は、自分の都合で左右される事柄ではありません。洗礼を受ける、それは、神様に服従することの告白でもあるからです。

実際に集まってでも、オンラインによってでも、礼拝を守る。そのことによって私たちは神様に服従する意思を明らかにするのです。

9 節から 11 節。

９：このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。

１０：こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまず

き、

１１：すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

神様への絶対的な服従の結果、イエス様に与えられたのは、「天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて・・・ひざまずき、すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえる」ことでした。

ここで注意をしたいことは、イエス様の服従による栄光は、イエス様に帰せられるのではなく、神様に帰せられる、つまり神様がたたえられることです。しかも、天上のもの、地上のものに加えて、地下のもの、即ち陰府の世界、死が支配する世界そのものまでがすべてイエス様にひざまずくのです。

このことが意味することは、私たちが神様に服従するいかなる業も、その栄光は、一切が神様に帰せられ、決して私たちが称えられることではないと言うことです。

何故でしょうか。

それは、神様に服従するその力は、私たちの内にあるのではなく、私たちを創られた創造主である神様によって与えられるからです。

12、13 節です。

１２：だから、わたしの愛する人たち、いつも従順であったように、わたしが共にいるときだけでなく、いない今はなおさら従順でいて、恐れおののきつつ自分の救いを達成するようにつとめなさい。

１３：あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。

今日一日の己の生活の全てを御手に委ねて歩むことの勧めです。

それが、神様に従順であることです。

さらに、パウロは、私たちの生活の在り方について忠告をします。

フィリピの人々にとって、より平和な、より喜びに満ちた交わりを願うためです。

14 節から 16 節。

１４：何事も、不平や理屈を言わずに行いなさい。

１５：そうすれば、とがめられるところのない清い者となり、よこしまな曲がった時代の中で、非のうちどころのない神の子として、世にあって星のように輝き、

１６：命の言葉をしっかり保つでしょう。こうしてわたしは、自分が走ったことが無駄でなく、労苦したことも無駄ではなかったと、キリストの日に誇ることができるでしょう。

不平や理屈を言わないと言うのは、どんな理不尽なことにも耐えて生活をしなさいと言う意味ではありません。どうすることが神様の御心に適った歩みであるのか、どのような選びが神様が喜ばれることであるのか、絶えず祈り求めて歩むことです。間違っても、冒頭の御言葉にあるように「利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払（って歩むことを）・・・心がけ」ることです。

それが行われた時、今この囚われの身となっているローマで、たとえ殉教の血を流すことになっても、パウロの喜びが内に満ちあふれると言うのです。

17 節と 18 節です。

１７：更に、信仰に基づいてあなたがたがいけにえを献げ、礼拝を行う際に、たとえわたしの血が注がれるとしても、わたしは喜びます。あなたがた一同と共に喜びます。

１８：同様に、あなたがたも喜びなさい。わたしと一緒に喜びなさい。

慰めと励ましに満ち、パウロの宣教を支えたフィリピの人々に対するパウロの手紙でした。

このような手紙を書ける信仰の友が与えられているパウロを思う時、パウロの宣教がどれほど素晴らしいものであったかを改めて知らされるのです。私たちの群れも又、パウロのこの呼びかけに応え得る、そのような交わりに生きることを目指しつつ歩みを進めたいと思います。パウロのこの呼びかけ、即ち「あなたがたに幾らかでも、キリストによる励まし、愛の慰め、“霊”による交わり、それに慈しみや憐れみの心があるなら、同じ思いとなり、同じ愛を抱き、心を合わせ、思いを一つにして、わたしの喜びを満たしてください」との呼びかけです。

祈りましょう。